

静岡文化芸術大講師の新妻淳子さん(45)は4月開講したデザイン学部「匠(たくみ)領域」を担当し、日本の伝統建築を教えている。

時の有力者の命による国宝や重要文化財の木造建築。名は残されていない職人たちの「途方もない人力」を想像するだけで心沸き立つ。「次代にも伝統を残し、魅力を伝える」と使命に燃える。

新妻さんは、鍛冶職人、故白鷹幸伯氏から「和釘(わくぎ)」を譲り受け、大切にしている。同氏は薬師寺再建などに際し、古代から江戸時代まで連綿と使われてきた和釘を復元した、として小学校教科書にも登場する。現代人が目にしているのは明治時代の輸入に始

まる、洋釘という。伝統建築の中で特に関心を寄せているのは、江戸(近世)の「駿府工匠」。久能山東照宮(静岡市駿河区)など徳川幕府による木造建築の造営を担った県内の職人たちだ。史料を読み解き、実像に迫る。

「平成の大改修」が進む

## 歩み続ける 平成から令和へ

—4完

新妻淳子さん (浜松・建築史家)

# 伝統継ぐ「人力」に感動

故白鷹幸伯氏から譲られた「和釘」を見つめる新妻淳子さん  
11月3日、静岡市葵区の静岡浅間神社



<皇室と建築> 世界最古の木造建築、法隆寺(奈良県)は聖徳太子が亡き父用明天皇のために建立した。薬師寺は天武天皇の命による。

心意気を代弁する。

やがて、それら名建築は国宝や重文として公開され始める。「かつて庶民は入ることができなかった。今は平等に見学できる。良い時代になったと思う」

修学旅行で訪ねた日光東照宮や京都・奈良の神社仏閣に魅せられた。法隆寺の宮大工、故西岡常一氏の著書を読んで宮大工に憧れ、高校卒業後、日本建築専門学校(富士宮市)に進み、伝統建築の道を歩み始めた。

和釘は静岡浅間神社の重文26棟にも無数に使われている。ただ、釘隠しの飾り金物などに隠れて「見えない」。その姿は木造建築を陰で支えた名もなき職人たちと重なる。「建物だけでなく、人も技術も道具も材料も、『伝統』を私たちの時代に失わせない」

と新妻さんは誓い、人の輪を広げようとしている。(加藤愛己が担当しました)

静岡浅間神社(同市葵区)で、重文「大歳御祖神社」は保存修理を終え、黒漆塗りの銅板屋根の下に極彩色の彫刻が映える。史料「御再建場所日記」を読むと、

江戸再建時の工程が分かるという許可証を必要とした。「どれだけの人の手によるだろう」。時を超え、思いはせる瞬間が楽しい。

職人は大工だけではなく、建造物を飾る漆塗りや彫刻、飾り金物の職人、屋根葺(ふ)き職人…。道具を作る人、材料を調達する人もいる。建前の際は「奉納人足日々二十五人宛」とあり、工程によっては地元の人々も協力した。職人たちは現場の出入りに「鑑札」

高の力を発揮したはず」と